

有機質入り全量基肥型肥料を活用した露地イチジク栽培

～有機質入り全量基肥型肥料で省力・低コスト施肥～

堀川英則（農業経営課環境・植防グループ

前・東三河農林水産事務所農業改良普及課）

【平成23年11月18日掲載】

【要約】

近年、露地イチジク栽培においては白色マルチシートを畝上に設置する栽培方法が普及しているが、シートをめくりながら行う夏期の追肥作業は重労働である。作業の省力化のため、有機質入り全量基肥型肥料を活用した施肥法を検証した結果、慣行に比べて、果実の肥大を損なうことなく、夏期の窒素分の追肥を2回削減でき、10a当たり肥料代は約40%の低減ができることがわかった。

1 はじめに

近年の露地イチジク栽培においては白色マルチシートを畝上に設置する栽培方法が普及しているが、シートをめくりながら行う夏期の追肥作業は重労働であり、栽培者の高齢化が進む当地域において改善が求められている。そこで、追肥作業を省力化するために、有機質入り全量基肥型肥料「いちじくてまなしワンタッチ」を活用した栽培方法の展示実証を行った。

2 調査方法

(1) 供試樹 10年生「柵井ドーフィン」3樹×2区（露地栽培）

(2) 調査時期 平成22年7月～10月

(3) 調査方法

- ① 1区につき 3樹×15新梢を調査対象とした。
- ② 1か月間隔で各新梢ごとに着果している果実の横径（10mm未満無視）を計測した。
- ③ 展示区と慣行区での施肥の違いは第1表のとおりである（展示区と慣行区で施用量が等しい礼肥や土壌改良材等については省略した）。
- ④ 第1表における10aあたりの投入窒素量は展示区で16.8kg、慣行区で18.4kgである。

第1表 展示区と慣行区における施肥の違い

区	施肥種類	施用時期	肥料名	施肥量 kg/10a	窒素 kg/10a
展示	基肥	3月上旬	いちじくてまなしワンタッチ	120	16.8
慣行	基肥	3月上旬	いちじく配合	140	8.4
	追肥①	6月上旬	固形30号	20	2.0
	追肥②	7月上旬	てまなくん	80	8.0
			計	240	18.4

3 結果

(1) 果実の肥大

調査による果実の横径の推移は第2表、第3表及び図1のとおりである。展示区と慣行区の間で果実の肥大に有意な差は認められなかった。

7月、10月の調査結果については、本稿では省略した。

第2表 8月30日（収穫時期）の着果段数と果実横径

	5段目	10段目	15段目	20段目	25段目
	mm	mm	mm	mm	mm
展示区	39.2	35.8	35.3	35.9	34.7
慣行区	41.0	35.0	34.0	34.0	33.5

第3表 9月27日（収穫時期）の着果段数と果実横径

	5段目	10段目	15段目	20段目	25段目	
	mm	mm	mm	mm	mm	
展示区	※	※	37.7	37.7	38.5	※ 収穫の進行により計測できないことを示す。
慣行区	※	※	40.1	36.9	35.8	

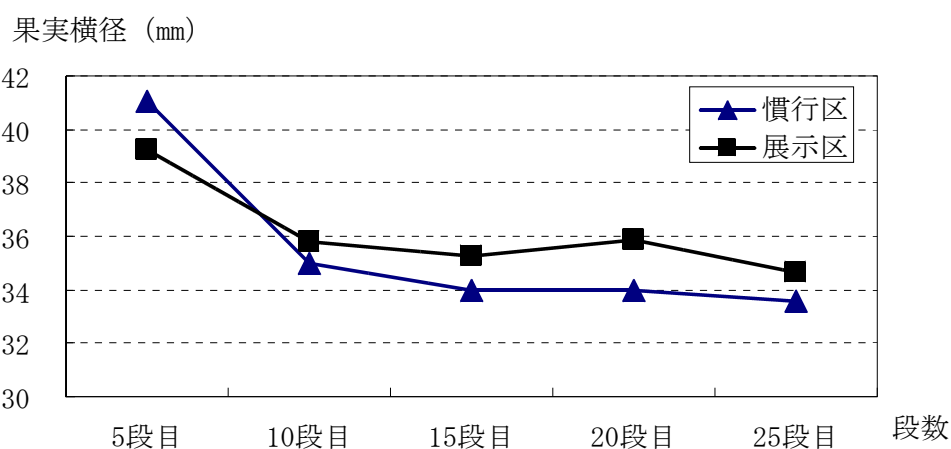


図1 結果枝の段数ごとの果実横径（調査日：8月30日）

(2) 省力効果

第1表のとおり、有機質入り全量基肥型肥料を活用すると窒素分の追肥を2回省略することができた。

また、写真1で示すようにペレット状であるこの肥料は、粉塵が舞うことなく、手早く均一に撒くことができた。



写真1 有機質入り全量基肥型肥料

(3) 肥料代の比較

第4表のとおり、有機質入り全量基肥型肥料を活用した施肥法は、慣行の施肥法に比べ、10a当たりの肥料代は13,130円少なく、約40%の低減ができることがわかった。

第4表 展示区と慣行区における肥料代の比較

区	施肥種類	肥料名	施肥量 kg/10a	肥料代 円/10a	慣行対比
展示	基肥	いちじくてまなしワンタッチ	120	19,200	59
慣行	基肥	いちじく配合	140	32,330	100
	追肥①	固形30号	20		
	追肥②	てまなくん	80		

※ 肥料代は平成22年1月時点の価格で算出

4 考察

有機質入り全量基肥型肥料を用いた展示区は慣行区と同等の果実の肥大が認められた。また、展示区での施肥法は夏期の窒素分の追肥を2回削減でき、ペレット状に加工されているため、一般的な配合肥料と異なり、施用時に粉塵が舞うことが無く、腰を屈めることなく高い位置からの手散布が可能であった。さらに肥料コストの低減ができることがわかった。

これらのことから、畝上のマルチ栽培と併せた省力・低コストな施肥方法として有望である。